

ては、「リスク」と「危険」はほぼ同じような意味で使われていますが、ルーマンは「決定」を軸に両者を区別します。起こりうる損害が何らかの「決定」に帰することができるものを「リスク」、そうではなく自然などの外部に由来するとされるものを「危険」と定義したのです。

この規定の重要性は、「リスク社会」が原子力などのテクノロジーにだけ関わる特徴なのではなく、ある事象を「神の意志」や「運命」に代わって人間の「選択」と「決定」に関連づけて理解する解釈フレームが一般化した近代の本性に関わるものであることを明確化した点にあります。職業であれパートナーであれ、慣習的にほぼ選択の余地がないような時代や社会と異なり、個々人の将来は、選択の自由度の高さとそこにおける「決定」にかかってくる、そういう社会における生は、決定と表裏一体のリスクから逃れることは限りなく不可能になります。

そして、この点はまた、近代に特徴的な時間性とも深く関わってきます。つまり、不確定な未来に向けて何らかの決定をしなければならないとき、普通は過去の事象が参照されますが、再帰的近代において過去のデータ（統計として示されるような）は決定を「支援」することができるだけで、現在における決定がリスクを伴う、あるいは新たなリスクを生み出すことを回避する役には立ちません。本質的に常に不十分たらざるをえない情報と根拠のなかで私たちは、現在をすでに起こった過去であるかのように見る未来の視点を先取りしつつ、決定を行わなければならない、こうした特異な時間性のなかに生きているのです。

コロナが露わにしたリスク社会の諸相

1年目の研究委員会の途中で始まった Covid-19 のパンデミックは、私たちがまさに「リスク社会」を日々生きているというリアリティを露わにしました。外出するのかもしれないのか、マスクをするのか、子どもを学校に行かせるのか、ワクチンを打つのか、など多くの選択が自粛や自己決定というかたちをとったのは、科学者も政治家も誰も十分な情報も根拠も持っておらず、正しい「決定」を下すことができないリスク社会にあることの現れです。そこでは決定しないこと、リスクを認めないこともまた、一つの決定となり、リスクと見なされます。

研究委員会もしばらくの中断を経て、その後はす

べてオンラインとなり、コロナが露わにしたリスク社会の諸相を当初の問題意識とつなげて検討することになりました。実際、感染者数を下げるという一つの決定が、休校や家庭状況、親の仕事などと結びつくかたちで、他の様々な問題を生み出すことになりました。そこでは、ある政策決定がなされることで「リスク」が生み出され、その帰結を「危険」として被る被影響者がいるのです。

また、国民という集団全体における感染リスクを下げるという目的が設定されると、マスクをつけない者、夜の街で働く者などが「リスクファクター」として特定され、さらに道徳的な非難の対象にもなります。こうしたリスクファクター自体のリスク化というのは、医療の領域では 20 世紀半ばから見られるもので、心疾患のリスクファクターである高血圧そのものが病気とされ、血圧を下げる薬が処方されるといった例が典型的です。こうした観点から本研究委員会の報告書では、ヤングケアラーとその親をめぐる問題、子どもや若年女性の性被害と婦人保護事業の見直しをめぐる問題を取り上げました。

また、教育については、教育格差言説とリスク言説の結びつきを問い直すとともに、新自由主義的な社会投資国家におけるリスクの管理として教育を通じた人的資本化が進行しているという問題についても論じています。

リスクという視座のもつ一つの含意は、リスクを回避するという決定が新たなリスクを生むということです。例えば、将来の貧困を回避するために勉強し自己を人的資本化したとしても、予測と異なる実際の未来では役に立たないとみなされるかもしれません。そうすると、他のことに費やせたいはずの時間や労力を無駄にするというリスクをいま冒していることになります。ある特定の社会システムへの適応そのものがリスクになりうるような不確実性の高い社会では、例えば学力の向上のような一つのことだけに個々が賭けることで対処するのではなく、何が起こっても生きていけるような仕組みを作らなければなりませんし、そのような仕組みを作っていける人を育てなければなりません。現行の社会は、地球環境問題から社会的格差の問題にいたるまで、将来世代に対してリスクを多く分配することで繁栄を享受してきたわけですから、学力の向上というかたちでリスクをさらに先送りにするのとは違ったやり方を考え、実行していく必要があるのです。